

泥坊

豊島与志雄

青空文庫

ある所に、五右衛門ごえもんというなまけ者がいました。働くのがいやでいやでたまりません。何か楽に暮らしてゆける途みちはないかと考えていますと、むかし石川いしかわ五右衛門ごえもんという大盗おおぬす人がいたということを知り、自分も五右衛門という名前だから、泥坊どろぼうになつたらいいかも知れないと考えました。

それで彼は家うちを飛び出して、ある橋の下に住みました。昼間はそこで寝て暮し、夜になると盗みに出かけました。ところが、そうやすやすと人のものを盗めるものではありません。毎晩しくじつてばかりいて、ろくろく御飯も食べられない始末になりました。

ある日なんか、一晚中駆け廻つても、物を盗むことはいうまでもなく、ごみだめから食物のあまりを拾い取ることも出来ないで、まだ朝の暗いうちにぼんやり帰つて来ました。そして、橋の欄らんかん干かんにもたれて、どうかして上じょうず手てな泥坊くふうになる工夫くふうはないものかと、しきりに考えていました。

すると、横の方からひよつこり、一人のお爺じいさんが出て来ました。五右衛門はびつくり

してたずねました。

「あなたは誰ですか」

「わしは仙人^{せんじん}じゃ」とお爺^{じい}さんは答えました。

よく見ますと、まっ白な長い髯^{ひげ}がはえていて、手には節^{ふし}くれ立った杖^{つえ}をつき、何だかわからないぼろぼろの着物をきて、なるほど仙人らしいようすでした。五右衛門^{ごえもん}は喜びました。仙人ならいろんな術を知ってるに違いないから、それを教わって、上手^{じょうず}な泥坊^{どろぼう}になろうと考えました。

「仙人ならいろんな術を知っていますか」と彼はたずねました。

「知っているぞ」

「そんなら、私にそれを教えて下さい」

お爺さんは承知しました。けれども、ただ一つきり教えられないと言いました。五右衛門は色々考えた後に、どんな隙間^{すきま}からでも家の中へはいれる術を習いました。

「わしにまた用が出来たら、ポンポンポンと三つ手を拍^{たた}くがよい。そうすればいつでも出て来てやる」

そう言ったかと思うと、お爺さんの姿は消えてしまいました。

五右衛門は不思議な気がしました。けれど、もうお爺さんのことなんかはどうでもいいのです。術を授つた上は、この上もない泥坊になれるわけでした。

二

翌日の晩、彼は喜び勇んで出かけました。かねて見当をつけておいた質屋の蔵へ行って、その戸口で術を施しますと、不思議にも、戸と壁とのわずかな隙間から、すーつと中にはいり込むことが出来ました。それで、立派な着物や時計などを思うまま盗んで、いざ外へ出ようすると、さあ大変です。同じ隙間ではありませんが、はいると出るのとは別だと見えて、いくら術を施しても出ることが出来ません。戸を開けようとはしましたが、外から錠がおりています。窓の所へ行つてみましたが、太い鉄棒の格子がついていて、身体が通りません。どうにも仕方がありませんので、盗んだ品物をみんなそこに投げ出して、暗闇の中に屈み込んでしまいました。けれども、夜は次第に寒くなるし、腹は空いてくるし、もうたまらなくなりました。

夜が明けて、番頭が蔵の戸を明けに来ました時、五右衛門は泣き顔をしながらも、捕

つては大変ですから、いきなり中から飛び出して、番頭があっけに取られてるまに、一生懸命逃げ出してきました。

はいるだけはいつてもだめだ、と五右衛門は考えました。それで、夜になりますと、橋の上に立つて、手をポンポンポンと三つ拍たたきました。例のお爺じいさんが、どこからかひよっこり出て来ました。五右衛門は頼みました。

「あの術はだめです。今度は、どんな隙間からでも家の中にはいつてまた出られる術を教えてください」

「それは駄目だめだ」とお爺さんは答えました。「出るとかはいるとか、一つの術しか教えられない。それにまた、今度新たな術を教わると、前の術はもう出来なくなるから、よく考えて何なりと一つを望むがよい」

「それでは、どんな隙間すきまからでも家の外へ出られる術を教えてください」
お爺じいさんは承知して、その術を教えました。

五右衛門ごえもんはあれかこれかと考えた末に、ふといいことを思いつきました。ある大きな宿屋へ行つて、すました顔で泊まり込みました。そして皆が寝静まった夜中に起き上つて、隣の座敷へ忍び込み、客の金入れを盗もうとしました。もし眼を覚まされても、戸の隙間から外へ出られるから平気でした。そういう安心があつたものですから、大胆だいたんにやっていますと、客が眼を覚まして「泥坊どろぼう！」とどなりました。五右衛門はびっくりして、すぐ雨戸の隙間から外へ術で逃げ出しました。ところがどうでしょう、そこは二階の屋根になつていて、下におりることが出来ません。まごまごしているうちに、宿屋中大騒ぎとなつて、家の中はもちろん今にもこちらへ人が見廻つて来そうです。五右衛門は命がけで屋根から飛び下り、したたか腰こしを打つたのも夢中で、逃げ出してしまいました。逃げるには逃げましたが、その時打つた腰が後で痛んで、二三日は橋の下にうんうん唸うなっていました。それでも五右衛門は、二度の失敗しやうに性しょうこりもなく、また三度目の考えをいたしました。例の通り橋の上にお爺さんと呼び出して、ぜひにと願ねがいました。

「もう今度きりですから、も一つ術を教えて下さい。私の身体からだが人から見えないようにする術を教えて下さい」

「身体が見えないようにする術だな」

「はい」

そして彼は、その通りの術を教わりました。

四

今度こそ大丈夫だと彼は思いました。自分の身体が誰にも見えないというのだから、どんなことをしたって平気です。昼間から町へやって行きました。

ところが不思議なことには、後からぞろぞろ大勢おおぜいの人がついて来ます。術をつかつているのだから誰にも見えるわけではないのですが、それでも大勢の人がついて来るのです。変だなと思つて注意してみると、がやがやした騒ぎの中に、こういう子供の声が聞き取れました。

「やあ、着物が歩いている……下駄げたが歩いている……お化けお化けだな……石を投ほうつてやれ……
捕つかえてやれ」

五右衛門ごえもんはびつくりしました。なるほど考えてみると、身体だけが見えない術だから、着物や下駄は見えるわけです。しまったと思つてるうちに、石がたくさん飛んできました。

かれは走つて逃げ出しました。

「着物が走り出した。それ追つかける！」

大勢おおぜいの者がわいわい言つて石を投りながら追つかけて来ます。五右衛門ごえもんは一生懸命に駆けましたが、向こうは大勢です。かわるがわる追つかけて来るのですから、彼はへとへとに疲れました。息が切れて走れなくなりました。頭や背中には石を投げつけられて怪我けがをしました。この上捕つかまったら、どんな目にあわされるかわかりません。彼は下駄をぬぎ捨て、着物をもぬぎ捨てました、そしてまっ裸で逃げました。身体からだだけは誰にも見えないものですから、ようよう橋の下まで戻つて来ることが出来ました。

彼はもうどうすることも出来ないで、裸の上からむしろをかぶつて、がたがた震えていました。頭や背中うしろの傷からは血が流れ出し、それがすぎすぎ痛んで、身動きをすることさえ出来なくなりました。

今度は五右衛門も、まったく閉へい口こうしてしまいました。夜になると、痛みと寒さで今にも死ぬような思いをしながら、橋の上まではい出してきまして、ポンポンと手を三度拍たたきました。

白髯しろひげのお爺じいさんがひよっこり出て来てにこにこ笑っています。五右衛門は泣かんばか

りに願いました。

「もう術はいりませんから、どうぞ着物を一枚と食物を少し下さいませ。お願いでございます」

すると、アハハハとびつくりするほど大きな笑い声がしまして、「大馬鹿者の五右衛門！」と叫んだ者があります。五右衛門は地面にすりつけていた顔を上げて眺めますと、もうお爺さんの姿は影も形もありません。そして、木の葉を綴った着物が脱ぎ捨ててあつて、その上に握り飯が一つちよんと乗つかっていました。

五右衛門はあつけにとられて、しばらくぼんやりしていましたが、やがて正気に復つてから、これはきつと神様が意見を下さるのか、それとも狐か狸に化かされたのか、どちらかだろうと思ひました。どちらにしても、自分が泥坊なんかをやるからこんなことになるのだと考えました。

彼はその握り飯を食い、木の葉の着物をつけ、橋の欄干につかまって立ち上がりました。もうこれから泥坊なんかはよそうと決心しました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成22）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泥坊

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>